これからの猪猟〈13回〉

田宮　治

夢をかけた原点

いつでも、どこでも、いくつになっても、愛犬たちと自分の力で思いどおりに大猪が撃ち獲れて、心から笑い悦べる安全・安心の納得できる最高の猪猟は、並の努力や頑張りでたやすくできるものではない。

私は「そんな理想の猪猟」をただ一人で、堂々と実現したいばかりに、全く独自の判断と努力によって田宮系猪犬と俺流猪猟を編み出したのである。

たかが猪猟であっても、猪猟を人生の趣味（生き甲斐）と決めたからには当然、目指したのは日本一の猪犬作りであり、猪猟の頂点である。

幸い、私の生国（新潟県村上市）は、秋田マタギと並ぶ新潟マタギの本場だった。猪と鹿はいないが、ヤマドリやノウサギ、テンなどは、どの猟場でも多く獲れる宝の山々であった。

私はこの絶好の狩猟環境の中で、小学三年生頃から猟場に出かけるプロ猟師の父や栄作兄、満兄たちの後を追っていた。そして、狩猟の何たるかを基本から叩き込まれたのである。

その頃の私の役目は、小型の秋田犬三頭と鳥猟のセター二頭の世話や、家で生まれた仔犬を毎日遊びの中で訓練することだった。

山では親犬と一緒に仔犬を放すのだが、毎回親犬に置いてきぼりにされていた。まだまだシーバーもない時代だったので、鳴き声を頼りに山中を捜し回った。谷間の小沢で泥まみれになってキャンキャン鳴いている仔犬を励ましながら、必ず自力で歩かせて連れ帰ったものである。

この時一番大事なのは、自力で歩かせることである。谷川を渡れなかったり、崖を登れなかったりして、仔犬がどんなに鳴き騒いでいても、絶対に抱きかかえない。

「よしよし、大丈夫だよ。えらいぞ」と、言葉で元気づけ励ましながら谷川の浅い所に導き、自力で渡らせたり、登りやすい所を選んで自力で登らせるという仔犬の山入りの大事な初期訓練である。

私はこの仔犬の初期訓練を手始めに、犬たちを遊びの中で訓練してその気持ちをがっちり摑み、何でも言うことを聞くまでに仕上げていた。

私は狩猟する父や兄たちを通して狩猟の素晴らしさや面白さを知り、ヤマドリやノウサギを撃ち獲るたびに狩猟にのめり込んでいった。

その頃はどの猟場でも、ヤマドリは十羽くらいの群鳥であり、冬ともなると雪上にノウサギの足跡が何本もの道となって踏み固められていた。当然、犬たちは獲物を撃ち獲るたびに一流芸に成長していった。

私もまた狩猟知識が限りなく高まり、犬たちの動きから、これはヤマドリの群鳥（犬が凄い勢いで藪中を大きくラウンドする）だと判断できるまでになった。

ヤマドリの群鳥は、初猟頃に赤い日本犬で攻めると、一羽や二羽は飛び立つが、そのほとんどは杉の木や葉の落ちていない大木の上に飛び上がる。

ところが、飛び立って木に止まるところを注意して見届けていないと、どんな達人でも見つけ出せない。そんな時、私は「あそこ、あそこ」とよく指さして兄たちに

小声で教えたものである。

また、犬たちが一気に小沢奥に突っ走った時は、間違いなくヤマドリの沢下りである。急いで見晴らしの良い所に移動して迎え撃たねばならないのであるが、そんなことはよほど体験を積まなければ分かるものではない。

ヤマドリは朝早く水を飲んだり餌を食べるために、田んぼやソバ畑や小沢に下りるのであるが、その後、昼頃までは歩いて、再び山の中腹の藪中に戻る。

さらに猟果を上げる肝心なポイントは、群鳥が昼でも必ず潜んでいる良い付き場を多く覚えることである。

初猟の頃のヤマドリは、餌場の近くや、小沢口などの比較的撃ちやすく、明るい開けた場所にいる。

だんだん秋が深まると、小沢の一番奥の水の流れが始まるモグラ原（ヤマドリの好む草）や、ツタで被われた笹やカナカブの藪中に昼でも必ず潜んでいる。ここは水や餌がいつもあって、遊んでいても天敵のタカやハヤブサから身を守れる安全な場所で、冬になっても群鳥で棲みついている。

そんな場所に犬を下方からかけると、一流犬ならば一気に沢奥の付き場まで突入して、山腹まで走って逃げるヤマドリを追い詰め、追い落とす。この追い落としがヤマドリ猟の一番の醍醐味で、世にいう「沢下り」である。

ヤマドリは一羽また一羽と、もの凄い羽音とともに、小沢の上空を目にも止まらない速さで沢下りして来る。兄たち猟師は見晴らしの良い場所に立って、これを迎え撃つのだ。

見事に当たった時は、急降下して来たヤマドリが一瞬ガクッと減速し、羽をすぼめて落下する。この様子が雑巾を投げ落とすのと似ていることから、「雑巾落とし」と呼ばれる。

こんな良い付き場のヤマドリは、犬たちをかけて攻めたとしても一週間くらい経つと必ず戻っているもので、面白い猟が何回でもできるのである。

このヤマドリの雑巾落としができるのは、小沢の一番奥辺りで、山肌が断崖の場所である。追われたヤマドリは、羽を使って急な岩場を走り登って逃げる。足の強い、岩場でも一気に追い詰められる一流芸の犬でないと、まず追い落とすことはできない。

足が遅くレンジの狭い英ポインターや英セターがどんなに上手にポイントしたところで、ヤマドリはあっという間に突っ走り、羽を使って断崖を走り登って峰を越えてしまう。

ヤマドリの沢下りに使役する名犬となると、当時、家で使っていた赤毛の小型秋田犬のアカ号や日本犬とセターの一代雑種であるブジ号を思い出す。

また、生国の猟場は山が険しく雪が多いため、足の強い俊敏な犬たちでないと、ノウサギやテン、タヌキ、熊までの五目猟には使役できない。アカ号とブジ号はこの五目猟でも活躍していた。

猟期中は毎日のように、おにぎ

犬舎の中で大切に育てられる仔犬たち。やっぱり仔犬は「熱いうちに打て」である

りを背に兄たちの後を追っていた。そして、犬の狩り込みと、それに対応する兄たちの行動を絶対に見落とさないようにいつも注意していた。

兄たちが銃を突き出し、身を乗り出して構えると、私はそのすぐ後ろにしゃがみ込んで息を殺して兄たちの動き――獲物を一瞬で射る絶妙のタイミングや、銃の狙いどころ、距離感に至るまでの銃さばき――を一つ残らず目に焼き付けたのである。

この経験を通して、私はアカ号やブジ号の鳴きや動きに対応する兄たちを見れば、犬たちが何を狩り、何を攻めているのか即座に判断できるようになっていった。

犬たちはいつも兄たちの前にいて、行く先々の峰筋から谷間まで狩り進み、その場に潜むノウサギやタヌキ、テン、熊までもどんどん追い出し、追い詰め、タヌキやテン、熊は必ず近くの木に狩り上げた。

地上を走れば絶対に追いつけない速さのタヌキや熊でも、木に上ぼればしめたもので、置き物を獲るようなものだ。

だが、テンは木に上がったからといって油断はできなかった。木から木に飛び移る速さときたら地上を走る兄たちよりも速く、山の斜面を追っかけて撃ち獲るのは大変だった。

このテンやイタチを撃ち獲れば一番お金になった。テンの皮は根白（毛の根元が白く他は黄色）が一番良くて、高く売れた。イタチの皮も二〇チンで、当時（昭和三十年代）千円であった。イタチは罠で一猟期に何百頭も獲っていたのである。

おやじの凄さ

今にして思えば、父や兄たちは趣味や楽しみのためだけに狩猟をやっていたのではない。まだまだ終戦（私が二年生）直後の食糧難の時代だった。自給自足が原則の生国にあっては、一家総出で農林業や馬車二台で運送業を営んでいたが、十二人の大家族の生活を支えるのは大変だったのである。

特に雪国の長い冬は厳しく、何もできなくなる冬期間を生き抜く術を大自然に求めた。それが狩猟だった。当然、獲れたものはタヌキまでも好んで食べた（秋の柿に付いたタヌキは美味である）。タヌキやテン、イタチ、ムササビは貴重な生活資金となった。

父は六丁の銃を所持し、甲種（罠猟）と乙種（銃猟）の両免許を取得していた。兄たちも当然、二十歳になれば乙種免許を取った。私や三歳年上の一巳兄らは父たちの出猟に連れ出された。

私は免許を取り銃さえ持てば、いつでも獲物を撃ち獲れるまでになっていたが、相変わらず兄たちの後を追い続けていた。実戦の中で、狩猟の基本を見様見真似で貪欲に学んでいたのである。

そして、五猟期目（五年）の中学生になった頃から狩猟の面白さや楽しさを知ることでどっぷりとのめり込み、さらなる高嶺の月（成功して何の心残りもない様）を追い求めることになったのである。

その学習方法は父たちが繰り広げる実戦見学であり、アカ号やブジ号の戦う勇姿を目の当たりにして覚えるものであった。

しかし、中学生になって気力や体力が充実して、雪中でも踏破できるようになったのを契機に、私の狩猟における立場はがらりと変身した。すべてを見て覚える鍛錬から、実際に勢子として実戦に参加して、兄たちとの共猟が訓練になったのである。

豪雪地帯にある生国の猟場は、十二月の下旬頃になると、いくら俊足で強靭なアカ号やブジ号でも深い雪に首まで埋まり、ヤマドリやノウサギを追うどころか、全く猟にならないのである。

雪の降る前は、犬の芸を楽しみながら小沢と小沢を丁寧に狩り進み、そのついでに小沢の要所やテンの渡り（沢越しにかかっている太いブドウやコクワのツル）に仕掛けてあるイタチやテンの罠を見回って、大沢の一番奥まで狩り込むのである。

昼食時に話す猟談議が一番の楽しみで、すぐに役立った。今しがたまで実践してきた結果を忘れないうちに、もう一度振り返って検

証するからである。

そして、一番奥から山越えして、帰り道となる大沢の一番奥に下りることになる。この山越えはかなり難所であったが、一日の最も期待される場所でもあった。

犬たちはその期待を裏切ることなく、山越えの途中で必ずノウサギを狩り出した。ちょうどよい切り株に座り汗を拭きながら少し待っていると、キャンキャンキャンと犬たちの追い鳴きが始まる。

「そら、出たぞ！」と、満兄はいつものようにノウサギが突っ走る八合目に残る杉林へ飛んで行く。

私は「待ってました」とばかりに、一メートルくらいの棒を握りしめて獣道のかたわらの大木の陰に急いで身を潜めるまでに成長していた。

ノウサギでも熊でも、巻き狩りで人力によってゆっくり追われれば、山中の藪伝いに杉林などの暗い所を選んで一番奥の窪地の峰を越えて逃げる。

しかし、一流犬に追われた場合は、噛み付くほどに急迫されるので、暗い所を選ぶ余裕もなく、明るい空いた所や小道（獣道）を必死で逃げる。

追われたノウサギは二間飛びと言われるように、俊足な犬に追われると、大きな耳を背中に寝かせて疾走する。その速さは実に凄いもので、並の腕前で撃ち獲れるものではない。

しかし、その凄い速さのノウサギも、逃げる時の特性さえ熟知すれば、意外に簡単に撃ち獲れるものである。

その一つは、犬に追われると山中の走りやすい所、いつも使っている道に乗ってグルグルと大きく回り、何度でも同じ所を通って逃げ続けるというものである。

猟人は一度ノウサギが通ったら、見晴らしの良い場所にタツを張ってこれを迎え撃てばよいのである。

ノウサギは逃げる時でも、少し犬と離れると大きな耳をピーンと立てて立ち止まり、周りの危険を絶えず探知している。一度タツ場に立ったからには、絶対に移動せず身動きもせず、静かに息を殺して待つことである。

グルグルと同じ所を何度も回って逃げるのは、自分（ノウサギ）の臭いを混同させて、犬たちの執拗な追跡をかわして逃げ延びる戦術である。

何とか早く一撃して、撃ち獲ることが大切だが、失敗してもかまわない。半矢にすることである。そうすれば犬たちは元気づき、血の臭いで絶対に見失うこともなく必ず仕留められる。

満兄が杉を伐採した跡の見晴らしの良い所にタツに立ったのも、私が棒を握って立ち木の陰に身を潜めたのも、ノウサギの逃走術を熟知していたからである。

アカ号やブジ号の芸ならば、ノウサギがどんなに逃走術を尽くしても絶対に見失わず、次第に山下に追い落として行く。ついには兄たちが働いている田んぼや畑に追い込み、鍬で獲ることもしばしばあった。

ここで言っておきたいのは、ノウサギは耳がとてつもなく良いが、目は意外と悪く、静かに動かないで待っていれば棒でも打ち獲れるということである。

私はプロ猟師の父や満兄たちに実戦で狩猟の基本を根本から叩き込まれ、その体験を重ねるたびにどんどん狩猟にのめり込んでいった。いつかは必ず兄たちのように銃を持って堂々と熊に立ち向かい、絶対に撃ち獲ってやると決心したのである。

まだまだ悪戯ざかりの青ガキが、棒を持つことで怖さや心細さを勇気に変えて獲物と戦い続けていた。

やがて冬が来て、一流犬でも雪のため猟ができなくなると、一巳兄と私が犬に代わって巻き狩りをやることになるのである。

長くて厳しい豪雪地帯にある生国の冬は、狩猟が生業となる。そのため一日たりとも休むことなく出猟するのである。

まだ規制がゆるかった時代というよりは、それが生業である以上は生き抜くために家族ぐるみで獲物を追うのは当たり前で、ノウサギや熊の巻き狩りは集落総出で実戦するのが伝統となっていた。

（つづく）